

国際室 だより

No. 52

最初で最後のコースリーダー顯末記（地下水資源開発集団研修コース閉幕） その1

昭和42年以来第23回を迎えた本年度の地下水資源開発集団研修コースは、去る7月7日から10月23日まで約4か月にわたって行われました。昨年度は本コース20周年記念として、研修修了者を対象に19か国20名の参加をもって、セミナー形式で実施されましたが、本年度は従来通り、通常の研修形式に戻して行われました。

<突然の御座敷>

今から7、8年前に講師として携わって以来、まったく本コースとの関わりがなかった筆者に、コースリーダーのお鉢が回って来ようとは夢にも思いませんでした。昨年の10月頃のお話です。それは以前から決定していた今年度のコースリーダーのピンチヒッターとしての突然の出番要請でした。本務の仕事が非常に忙しいと日頃から嘆いている筆者へのこの要請には、最初はいささか当惑してしまいました。しかし、忙しいのは誰しも同じだし、その要請を断わる理由にはなりません。筆者が断わっても誰かが肩代りをし、その人に負担が移行するだけで、問題は少しも解決しません。もともとべらめえーの江戸っ子気質、ウジウジするのが大嫌いの筆者。そこで、ヤリヤーいいんでしょってな訳で、行きがかり上、コースリーダーなど大した忙しさではあるまいと高をくくって、結局引き受けてしまったのです。

何をするにも自分の特色を鮮明に出さないと、気が済まないのが筆者の持ち味（ひとはそれを筆者の最大の欠点と評するが、頑固一徹の筆者は、馬の耳に念仏、一向に意に介さない）。ひとが白と言えば、白と心では思っても黒という、天の邪鬼。一度言い出したらテコでも動かない強情っぱり。こんな筆者にコースリーダーを頼んだが最後、頼んだ方が悪いんだとばかり聞き直りさあてお立会い、地下水コースのペレストロイカの始まり始まりーっ。

<ペレストロイカ その1>個別研修の採用

毎年研修の最終日に、研修生が本コースの主催者である国際協力事業団（JICA）や地質調査所（GSJ）に対して行い評価会議があります。JICA があらかじめ研修生に提出を求めたアンケートをもとに、コースの内容全般に

わたって研修生の生の声を聞く場です。研修生は、彼らの冷静な目でとらえたコースのカリキュラム・期間・講師の評価・コースの有用性等について、ザックバランに意見を述べ、各設問に「優」「良」「不可」の判断を示します。研修生はここぞとばかり、日頃の不満を爆発させ、遠慮のない意見や要望を出してきます。コース全体を企画したコースリーダーにとっては、まな板の鯉も同然。どんな評価が出ようとも、終ってしまったものは、直しようがありません。死刑執行前の囚人よろしく、首を洗って黙って待っているしかないのです。

毎年の評価会議に、必ずと言ってよいほど出される話題の一つが、全体研修が長過ぎ、個々の希望する課題について十分な研修が受けられなかったと言う不満です。本所のもう一つの研修コースである「沿海資源探査コース」では、すでに何年も前から、個別研修を採用し、研修生の要望を満たしています。本「地下水コース」でもできないわけがありません。そこで、今年から思い切って、2か月の期間で個別研修を採り入れることに決定しました。筆者の腹ではコースリーダーを引き受けたその時点から、というより、それよりずっと以前から個別研修を採り入れるべきだと決めていたのです。

<ペレストロイカ その2>運営委員の若返り

個別研修を採用するのはよいが、本所だけで研修生全員を受け入れることは、マンパワーの点から到底できな

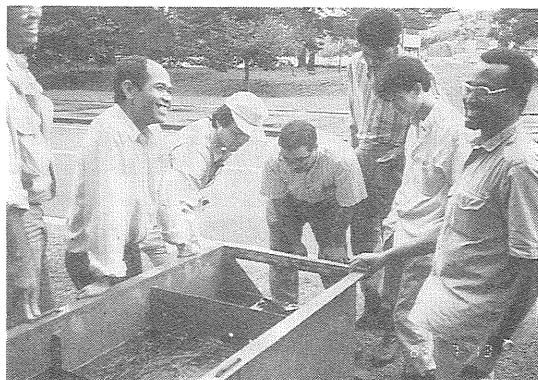


写真 揚水試験実習風景

い相談です。そこで、本所では2名程度を受け入れることにして、残りは外部にお願いすることにしました。外部といっても、実際には誰に個別研修の指導をお願いするのが大きな問題です。筆者の頭の中に次々に地下水の研究者の顔が浮かんで消えましたが、専門分野や地域性、さらにパーソナリティー等を念頭に、最終的には学界で気鋭の活躍をされている4人の先生がた(秋田大学教育学部 肥田登氏:京科大学理学部 北岡豪一氏:三重大学教育学部 森和紀氏:筑波大学地球科学系 鈴木裕一氏)にお願いすることにしました。

筆者の考えがまとまるが早いか、先生がたに早速電話をかけたのは言うまでもありません。先生がたは筆者の突然の申し入れに対し、最初戸惑った様子でしたが、こちらの意図を十分に理解し、二つ返事で引き受けて下さいました。

個別研修をお願いするからには、その期間だけではなく、コース全体についてもご意見を伺う意味で、運営委員をも引き受けて戴くことにしました。従来の運営委員の先生がたは、その道の大先生で構成されていましたが、今年はいっぺんに若返ってしまったこととなります。

<ペレストロイカ その3>若い講師起用

従来までの本コースの講師陣は、大学で言えば教授クラスの偉い先生がたが多く、講義の内容については研修生の評価が高かったのですが、いかにせん、講師の年齢が高く、意志の疎通という面で、研修生にとって若干の気後れがあったように見受けられました。そこで今年は学界の中堅から若手として活躍している人に、積極的に講師陣に加わってもらうことにしました。講義の出来はベテラン講師の方が、間違いなく優れているでしょうが、若い講師にはバイタリティーがあります。研修生にとって、若い先生がたは自分達の気の置けない兄弟分に写ることでしょう。その気軽な雰囲気、予想もしない好結果をもたらすことは、想像に難くないことでした。

また、従来までの講師陣には、なぜか本所の職員が極端に少なかったのです。「水」に関する若手研究者は、かなりの数が揃っているのですが、どうしたわけでしょう。

今年は、集団研修の講師陣に本所内から11名、外部から7名、合計18名を起用しました。平均年齢は、30歳後半というフレッシュさで、そのうち、本コースの講師経験者はわずか4名に過ぎません。

<割当国>

本コースの募集要項(GI)が、3月初めに関係諸国に発送されました。といっても、全世界にばらまくわけ

ではないのです。個別研修の定員を考慮すると募集人員は6か国6名ですが、応募が少なかった時のことも想定して、2か国2名を追加割当て、合計8か国にGIを送るとJICA側の説明。この割当国と言うのがくせ者で、本所の希望は定員の3分の1、つまり2か国しか指名できないのです。

外務省で決定された残りの6か国の割当国リストを見てビックリ、そのほとんどがアフリカの国ぐにだったのです。本所としては、地域的な分布を勘案して、外務省に対し、中南米やアジアの国を加えて欲しいと要望しましたが、アフリカの国とアジアの国を、1か国入れ換えてくれただけでした。結局、最終決定した割当国はアジア3、アフリカ5か国。締切までに、割り当てた8か国すべてから、合計10名の応募者がありました。

<研修生選考のスタッモング>

応募書類が出揃った5月下旬、本所で研修生選考会議が開かれました。会議には本所国際室、JICA 筑波インターナショナルセンターの関係者、それに、本年度コースリーダーの筆者が出席。本年度の募集人員は6名。その会議で、応募資格に照らし合わせて、筆者が示した6名の候補者は、スンナリ了承されました。問題は残りの応募者の扱いです。2名の応募者を推薦してきた国からは、そのうちの1名しか採用しないという案は、まったく異論なし。1名の応募者を厳選してきたあとの2か国に対しての不合格通知は、「よっぽどの理由がない限り出せない、何とか受け入れて欲しい」とはJICA側の見解。「そんなこといまでも言われても個別研修受け入れ先が、これ以上ありませんよ」というのが筆者の考え。結局、6名合格、2名保留、この2名分の個別研修受け入れ先を、早急に検討するという事で会議は終了。

さァー大変。またまた難題発生。2名のうちの1名くらい、本所でなんとか受け入れることにして、問題は後の1名。この期に及んで研修生を2か月間も、面倒を見てくれるようなところがあるのだろうか。数日間悩んだ末、はたと思い付いたのが、新潟に本社を持つ榊興和。地下水開発調査の総合コンサルタント。知合いを通じて恐る恐る打診したところ、翌日には早速受け入れ可能の返事。いァー嬉しかったですネ。何故って、JICAとは今までまったく無関係で、本所とも余り関係がなかった企業が、ボランティアを引き受けてくれる。こんなこと、ちょっと考えられませんかヨ。

本所からの通知を受けて、早速、2名の保留者に対しても、合格の公電が外務省から打電されたことは、申すまでもありません。 つづく(田口)